

けた。

2 太宰治『人間失格』(新潮文庫)

中学生のときに読んでから、何回か読んで
いるが、読むたびにユーモアが濃く感じられ
る。一流のものには、ユーモアがある。ちな
みに、私のもっている定価五〇〇円の新潮文庫
は、二八刷(一九六一年)で一三〇ページだ
が、学生のもっている定価二八六円の新潮文
庫は、一九三刷(二〇一四年)で一八五ペー
ジ。

3 長岡鉄男『長岡鉄男のいい加減にしま
す』(音楽之友社、一九九八)

まだオーディオ界というものが存在してい
た頃、ずば抜けたオーディオ評論家だった著
者の、雑文集。「古き良き時代」の発売当初
も、たしか、このアンケートに挙げた記憶が
……。

4 Eva Weissweiler: *Otto Klemperer* (Kiepen-
heuer & Witsch, 2010)

一〇代の学生の頃、授業をさぼって渋谷の
名曲喫茶ライオンに行って、よくワグナー
をリクエストしていた。ライオンには職人カ
ランではなく、音楽家クレンペラーのレコ
ードが多かった。はじめてドイツ語で書かれ
たクレンペラー伝。読み終わってから、すぐ
れた明石政紀訳が、みすず書房から出ている
のを知った。

5 石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』

(講談社現代新書、二〇一五)

ヒトラーといえば、ホロコースト。忘れて
はならない犯罪だが、今は、ヒトラーが人び
とを惹きつけた「魅力」に注目すべき時代
だ。新資料を駆使した新書で、著者はホロコ
ーストを最重視したと言っているが、この本
の魅力は、ヒトラーが人びとを惹きつけた
「魅力」を明快に描いている点にあると思う。

川本隆史
(社会倫理学)

1 鶴見俊輔『思想の科学』私史(編集グ
ループSURF、二〇一五年)

同人誌「活字以前」に連載していた「倒叙
『思想の科学』私史」(全二四篇)が、未発表
の分まで含めて遺著にまとめられた。稀代の
編集者・鶴見俊輔(一九二二-二〇一五年)
が手塩にかけた雑誌『思想の科学』(一九四
六-一九九六年/通巻五三六号)をめぐる人
間模様がいかに細かく描き出される。黒川創に
よる鶴見への聞き書き「もやい」としての
『思想の科学』および黒川へのインタビュー
形式をとった「解説」いつでも編集を考えて
いた」も読み度がある。鶴見のデビュー作
『哲学の反省』初版本(一九四六年)ともど
も、私の「宝物」としたい。

2 広島県立広島第一高等学校女学校有朋会四十
五期追悼の会編『原爆』八月六日 平和への

祈り——あの時の縣女を語ろう(二〇〇七
年)

あの八月六日の朝、地元で「県女」と呼ば
れていた名門の高等女学校(広島県立皆実高
校学校の前身)の一年生(一九四五年四月六
日入学、全六クラス)の大半は市内の建物疎
開に動員され、二三人が被爆死し、四〇数
名が生き残った。学友たちが生きた証しを残
そうと尽力した有志の手により、遺族や関係
者六〇人以上の文章が集められ、当事者の日
記や学苑日誌など貴重な資料を加えた冊子が、
二〇〇七年七月の初刷から版を重ねている
(B5判一八七ページ)。

心ある方がたの間、とりわけ教育現場で読
み継がれていくことを切に望む。問い合わせ
のファックスは082-547-6565(宍戸和子さ
ん) もしくは0422-22-7566(高橋富久子さ
ん)まで。

3 辺見庸『1★9★3★7』(金曜日、二
〇一五年)

辺見が「世界的傑作」と評する武田泰淳の
短篇「汝の母を！」(一九五六年)は、武田
の『全集第五巻』(筑摩書房)に収録されて
いる。その巻の解説を担当した開高健が「そ
こに述べられている事実の絶対ぶり、異界ぶ
りにはただ沈黙しかない。文学の『解説』の
対象として扱われるには三度も十度もためら
いにくなる」との真情を吐露しているそうだが、

辺見のこの力作を、「読書アンケート」の対象
として扱うのにも正直ためらいすら覚える。
それほど読む者に迫り、重い読後感を残す書
物なのである。要らぬコメントは抜きにして、
「未読ならあなたは『1★9★3★7』を
むしかなないのだ」で済ます手もあるだろう。

「一九三七年の中国で、「皇軍」兵士である
おまえは、軍刀をギリギリと抜いてひとを斬り
殺してみたくないいっしゅんの衝動を、われ
にかえて狂気として対象化し、自己を抑止
できたのだろうか——と問いつめるため」、病
軀に鞭打つように綴られていく。前後して上
梓された『もう戦争がはじまっている』(河
出書房新社)と合わせ読みたい。

4 山浦玄嗣『イチジクの木の下で——』ガ
リラヤのイェシュエ』と合わせて読む新約聖
書四福音書解説書』上・下(イー・ピックス、
二〇一五年)

岩手県大船渡市の開業医にしてご当地の方
言(ケセン語)に福音書を翻訳する偉業を成
し遂げた著者が、イエスの「よきたより」の
核心を解き明かす。「イチジクの木の根元に
いる」とは、「聖書をしっかりと学ぶ」という
意味のヘブライ語の慣用表現。「神の国」、
「聖霊」といった定訳を「神さまのお取り仕
切り」「神さまの熱い息吹」と訳し砕いたね
らいや苦心を分かりやすく伝えてくれる。

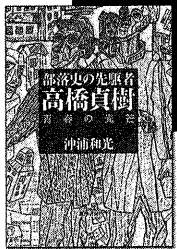
ドクター山浦の訳業からいちはん啓発を受
けたのは、ギリシャ語「デイカイオスエネ
ー」(ヘブライ語では「ツェダーカー」)に対
して従前の「義」なる抽象名詞を宛てず、
「施し」という具体的な行為につなげたこと
ろ。すなわち、マタイ伝第五章冒頭の「義に
飢え渇く人々」および「義のために迫害され
る人々」は、それぞれ「施しにありつきそこ
ねて、腹が減っている人、咽が渇いている

部落史の先駆者・高橋貞樹

青春の光芒

沖浦和光

被差別部落史研究の先駆的業績とされる
「特殊部落」千年史」著者である高橋貞樹
は治安維持法下に激しく生きた。その青春
像を様々な調査資料を基に描き出す。



● 本体2600円＋税

筑摩書房

サービスセンター ☎048(651)0053
http://www.chikumashobo.co.jp/

なる、故・原田正純氏の講演会の記録(二〇〇四年一月九日発行)を増補したもの。「いのちを大切に、そしてその弱い立場に徹底的に立っていくところから学問というものをもういっぺん見直してみよう」と訴えた原田氏の「水俣学」のエッセンスを学ぶことができる。問い合わせはinfo@kumpul.co.jpまで。

ノーマ・フィールド
(Norma Field 日本文学)

1 下嶋哲朗『平和は「退屈」ですか——元ひめゆり学徒と若者たちの五〇〇日』(二〇〇六年に岩波書店より刊行されたものに「一〇年後の現在」が付された岩波現代文庫)

物心ついて以来、といっても大した過言ではないと思うが、戦争は恐ろしいもの、あつてはならないもの、と教えられ、信じてきたが、平和を語ることの困難も痛感してきた。

あの悲惨な戦争体験をもつ沖繩、他府県よりも徹底して平和教育を行ってきた沖繩、米軍基地が密集する沖繩。なのに、同時にだからこそ、本気で平和を語るのがむずかしいよう

うだ。平和を語ることに纏わるもどかしさや疑問と向き合うことも、息も絶え絶えとなつてしまった平和を復活させる手立てではないだろうか。

2 Chang-Rae Lee, *On Such a Full Sea* (Riverhead Books, 2014)

るかといった課題を、なぜアイデンティティの政治が代表を得るのに困難を抱えるかといった視点から解き明かそうとする点で、フェミニズム理論にとっても貴重な提言と示唆を与えてくれる。

三浦のいう身体的経験への注視は、物理的な拘束を受けたり、直接的な侵害を受けるのとも異なる形で暴力性を看取する態度と心性の涵養を、民主的な取り組みとして促してくれる。その意味で2は、「表現の自由」の理念的な至高性を憲法学上説いてきた合衆国において、9・11以降、合衆国に蔓延したイデオロギイ諸国出身者とみなされる——誤承認も含めた——市民に向けられたヘイト・スピーチは、「安心」という公共財、そしてあらゆる者が尊厳をもって扱われるべきだとする公的な秩序に対して危害を与えていると訴え始めた筆者自身に送りつけられた、憎悪メールに対する筆者の身体的反応の集積といえるかもしれない。

ウォルドロンが、控えめに、公然と憎悪表現に晒される「動物呼ばわりされる集団」がどのような危害を被っているかを想像するべきだと提言したのに対して、かれを「全体主義者野郎」呼ばわりする者たちが寛容の立場に居座るといふ皮肉。それは、二〇一五年十二月二十八日に突然発表された「慰安婦」問題に対する日韓合意後に、あたかも問題を解決

韓国生まれでアメリカ育ち、現在プリンストン大学の教授である著者の小説はたかひ評価を得ながらも、一作も日本語に訳されていないようだ。この作品は「フェイストピアSF」と分類されがちだが、"social science fiction" (社会科学小説)とも命名されよう。

環境破壊、階級・人間間の葛藤の末、アメリカ社会が崩壊してしまつた、近未来の世の中が舞台となつている。生産を担う層は環境破壊が進んだ中国から移住してきたらしい人々によつて構成されている。近未来とはいへ、現在すでに顕著な諸問題を巧みに組み合わせひとつの有機的な、しかし極限的に管理された世界として描いているため、憂鬱なリアリティをもつて迫ってくる。読み続けることができるのも、不思議な新鮮みと飾り気のない魅力を放つわかい女性主人公のおかげだろう。

岡野八代

(政治思想)

1 三浦まり『私たちの声を議会へ——代表制民主主義の再生』岩波書店

2 ジュレミー・ウォルドロン『ヘイト・スピーチという危害』谷澤正嗣・川岸令和訳、みすず書房

3 金富子・板垣竜太(編)『Fight for Justice』ブックスレット3 Q & A 朝鮮人「慰安婦」と植民地支配責任——あなたの疑問に答

するために汗をかいたのは韓国政府だといわんばかりの日本社会の言論状況にも通じる。3は、二〇一四年から刊行され始めた、「慰安婦」問題に対する、誤解・曲解を含んだ様ざまな疑問に丁寧に答えていくシリーズの第三弾。「慰安婦」問題をめぐる日本の言論状況にしっかりと応えつつ、「植民地責任」という新たな枠組みで、安倍談話に象徴される「慰安婦」問題理解を根底から紡ぎなおしていく。

日本は植民地主義をいまだ克服し得ていないのか、それとも新たな時代のなかで、たとえば合衆国で九〇年代以降進行し始めた新自由主義と新保守主義との悪夢の連携にみられるように、わたしたちの認識枠組みや政治意識が再創造され始めているのか。4は、ブラトン『国家』とフーコーの生政治を参照しながら、心身から民衆が作りかえられている現状を厳しく解き明かす。

展望なき時代のありように、現状に対する処方箋をつい早急に求めたくなる。しかし、逆にそうした時代だからこそ、歴史的文脈のなかで、理念を見失うことなく、現状を見つめる力をわたしたちは必要としているのだらう。

えます』御茶の水書房

4 Wendy Brown, *Undoing Demos: Neoliberalism's Stealth Revolution* (New York: Zone Books)

二〇一五年を振り返ってみれば、イスラーム国(IS)による邦人人質殺害に始まり、劣化しつつ巨大化する政治勢力によつて、戦後日本の民主政治の底が抜けてしまつた年であった。他方で、街頭だけでなく、言論界においても、戦後政治、立憲主義、民主主義、そして安全保障の本質を問う著作が多く公刊されたことは、記憶されておくべきだろう。そのなかで、政治の底が抜けているという事実から新たに、七一年目を迎える戦後日本社会にとつて、わたしたちが一步を踏み出すために、是非とも携えておきたい二〇一五年刊行の四冊を挙げたい。

1は、現在の日本政治が皮肉にも身をもつて有権者に示している、多様な生を反映しない代表制民主主義の、機能不全と無責任ぶり(カルテル政党化)がいかなる政治機構構えに生じたのかを、「代表」概念を丁寧に説明することで解き明かす政治学の良書であり、かつ制度論と民主主義理論の書として今後、つねに参照される基本書となる。とりわけ財政赤字、民主主義の赤字に加え、ケアの赤字の深刻さを指摘する本書は、身体的異なりからくる多様な経験をいかに政治に反映させ

熊谷晋一郎

(小児科学・当事者研究)

異なる他者と言葉を交わし、異なる生の歴史に想像力を働かせることの重要性を教えたくれた五冊を選んだ。

1 岡原正幸ほか『感情を生きる——パフォーマティブ社会学へ』慶應義塾大学出版会、二〇一四年

衝撃的な出来事に見舞われたとき、私たちはしばしば、絶望とともに、「なぜ」という問いを発せざるをえなくなる。本書では四人の社会学者が、みずからの社会的な問いを発するきっかけとなった、個人的な経験とそのときの感情を、率直に開示している。「棘」のように突き刺さり続ける過去を、それぞれ著者が抱えている。そしてそれらの経験が、問いをうながし、やがて学問へとつながっていく様子が、慎重に、誠実に、描かれていく。

2 伊勢崎賢治『本当の戦争の話』しよう

——世界の「対立」を仕切る』朝日出版社、二〇一五年

多様な歴史を背負った多くの人々が織りなす現実の世界は、善悪が流転し、めまいがするほど複雑だ。つい自己中心的な視角で単眼的に理解する誘惑に駆られるし、自分や仲間